

# 『捷解新語』における並書表記について —舌内入声音、促音の書記例を除いた並書を中心に—

趙來喆

キーワード：語末・文節末、先行母音、硬音、長音、音声表記

## 要　旨

『捷解新語』に用いられる並書表記は、舌内入声音や促音等にも多く用いられるが、その他の例にも数多くの並書表記が用いられている。しかし、並書表記される例には統一した規則性が求められず、それぞれの説明が必要される場合が多いようと思われる。そこで本稿では、『捷解新語』原刊本に用いられる舌内入声音、促音の書記例を除いた並書表記を中心に調査を行うとともに、今まで取り上げられなかった單書表記との対比を通して並書の考察を行う。そして、舌内入声音、促音の書記例を除いた並書表記は、朝鮮語を母語とする編者が並書のもつ「硬音」「長音」という資質を活かした余剰的表記としてほとんどの例が語中・語末の環境に用いたものであり、日本語の現実音を忠実に反映しようとした音声表記であることを明らかにする。

## 0. はじめに

『捷解新語』の朝鮮語による音注と対訳の並書表記<sup>1</sup>は、それぞれ各自並書と合用並書として対照的な表記法が用いられていることが指摘されている<sup>2</sup>。また、ハングル音注における並書表記が数多くあり、並書表記される用例の性格からみて統一した解釈を施すには無理があるようと思われる。よって、本稿では以下の(ア) (イ) (ウ)の分類のうち、(ア), (イ)の例とは別に、並書表記の用い方が均質的ではないと思われる(ウ)を中心に検討・分析を行うこととする。

- (ア) zo-u-mo-ccu<sup>3</sup>(雑物) . . . 舌内入声音の並書例
- (イ) mot-tto-mo(尤も) . . . 促音の並書例
- (ウ) kin-cu-kka-i(気遣い)、tyoin-KKI(天氣) . . . (ア), (イ)例を除いた並書例  
(下線は、並書表記を示す。以下同様)

(ウ)では、舌内入声音と促音の書記例を除外した並書表記<sup>4</sup>として、出現するすべての例が並書表記される例(例えば「ko-sso」)と、同じ語であっても刊本によって表記が異なる例など、同じ音節が同じ環境において並書・单書表記される例が少なうない。そこで、並書表記がどういう語に用いられ、また、どういう環境で現れるのかについて総合的に分類・整理してみることにする。

## 1. 先行研究及び問題の所在

『捷解新語』における並書表記の分類については、森田武(1957)と安田章(1960)等により取り上げられている。森田(1957, p235)は、「捷解新語」原刊本における並書表記の分類を次のようにまとめている。

- (a) カ行・タ行の清音各音節、およびソ・ノの十二音節に限って現れる。
- (b) 語によって並書だけを用いたもの(助詞「こそ」のソなど)もないではないけれども、なお、助詞「から」のカに ka, kka があり、助動詞「た」に ta, tta があるように、同語が二様に記されたものもあって、全体的には必ずしも語に固定しているとは言えない。
- (c) 必ず語中・語尾に限って用いられ、語頭の例は全く存しない。
- (d) 前述のバ・ボの場合(バ行の濁音表記は、多くの例に p- が用いられるが、さいばん(裁判)、かんぼく(看品)の例のように並書の pp- が用いられる場合もある: 筆者注)を除外すれば、明らかに濁音を写したと考えなければならぬような例は見出されない。
- (e) 先行の m・n・ŋ と応じて濁音を示す方法、即ち〔鼻音+清音〕の清音の位置に用いられたと見られるものは存しない。
- (f) 「もつとも」(九8ウ)を mot-to-mo と記すような促音表記の、先行の t と応ずる位置、即ち、右の to 位置に用いられた例はほとんどない。右と同じ語を mot-tto-mo としたのは(五6ウ)、珍しい例外である。

安田(1960)は、原刊本との対比を通して、重刊本における重ね子音による表記(本稿の並書表記)について、原刊本ではカ・タ行の清音各音節、ソ・ノの音節等の十二音節が並書表記されるのに対して、重刊本ではノが姿を消し、クワ・キヨ・シ・ス・セ・シャ・ショが新たに登場することによって十八音節であることを指摘している。以上、両氏の並書表記における共通点をまとめてみると、カ行・タ行などの語中・語末の音節を中心に並書が用いられていることと、並書表記が必ずしも語に

固定していないことがわかる。また、両氏の調査により、原刊本から重刊本にかけての並書表記の異同を垣間見ることができる。しかし、両氏の調査では詳細に検討されていない語頭や濁音の並書表記の例については、本稿が原刊本を調査したところによると、語頭の並書表記1例と、濁音の並書表記4例が認められる。これらの語頭や濁音の並書表記の例は、原刊本だけではなく改修本・重刊本においても見られる例として次節以下で詳しく検討する。

1) 語頭の並書例<sup>45</sup>

したしたにもつかわしらるやうにこそさしられ(八2ウ)

(下々にも遣わしらる様にこそさしられ)(捷解新語訳文、以下同様)

## 2) 濁音の並書例

すいもくせん加ほむしろ加わるうて(水木船が帆篷が悪うて)(一11ウ)

われらなわなに加して御さる(我等名は某で御座る)(一17オ)

もんこん加ようて(文言が好うて)(三12オ)

とうもこうも申されん加(如何も斯うも申されんが)(四13オ)

一方、並書表記の性格について、濱田敦(1955)、安田章(1960)、Cho(1970)、荒木雅実(1975)などは一種の清音表記、濁音表記、アクセント表記、強調表現であるとする。まず、安田(1960)では、濱田(1955)の説を受けて「日本語の、カ・タ行子音と、朝鮮語の k·t(c) で表わされる子音との間の音声的くい違いを調整するための、一種の清音表記」であるとされる。また、「濁音を修飾していた鼻音的要素の衰退とともに、その声門閉鎖的要素が薄れてゆくことを、姿を消したノに投影することが出来るであろう」とし、「声門閉鎖的要素と鼻音的要素との音韻体系の均齊(symmetry)」を認めている。しかし、並書表記が用いられる理由について、「声門閉鎖的要素と鼻音的要素との音韻体系の均齊」であるという考え方には、以下のような疑問点が残る。

\* 日本語のカ、サ、タ、パ行音により近く発音するための清音表記であるとすれば、なぜ並書表記が助詞、助動詞などの特定の語や音節を中心に用いられたのか。

\* 声門閉鎖的要素と鼻音的要素との音韻体系が保たれたとすれば、原刊本以後、濁音や助詞「の」の並書表記の衰退とともに、カ、サ、タ、パ行音の並書表記も衰退していくはずであるが、そのような変化は見られず原刊本には見られなかった「クゥ・キヨ・シ・ス・セ・シャ・ショ」の並書表記が重刊本に

おいて新たに出現するようになったのはなぜか。

なお、安田(1960)は、「声門閉鎖的要素は、アクセントの高い部分に保存され易く、次いで、重ね子音のあるものは、アクセントの表示という、違った機能に移行していったと想像を逞しくしたいのである」と述べ、アクセント史からの解明を示唆している。また、Cho(1970)においても kk, ss, tt, cc のように並書の音注が用いられる理由を「pitched or stressed」であるとし、アクセントによる解釈を試みている<sup>6</sup>。例えば、/toukka/( [to<sup>1</sup> oka] ~ [to<sup>1</sup> ka] ), /mitsikkai/( [mizjika<sup>1</sup>i] )などのように、並書が現代日本語のアクセントに一致する例と近似する一部の例を示しており、近似しない例については『捷解新語』と現代日本語との時代的な差や方言的に大きな隔たりがあることを理由として、アクセント説を否定することはできないとする。ところが、並書表記がアクセントによるものとして推定するには以下のよな問題点が残る。

\*並書とアクセントの不一致・・・時代性、方処性を考慮して「補忘記(貞享版)」に基づいてアクセントを調査した結果、「捷解新語」の並書用例と一致している語が少いことと、並書用例が掲出されたとしても、並書表記とアクセントが必ずしも一致していない<sup>7</sup>。特に、「こそ」の例は「上平」<sup>8</sup>アクセントであるものの、kko-so が用いられる例は見られないのに対して、すべての例(原刊113例、改修19例、重刊8例)に ko-sso が用いられており、並書とアクセントとが一致していないことがわかる。

\*並書表記の特定の音節や環境への偏り・・・並書表記はカ・サ・タ行子音や「の」(nno)などの音節を中心に用いられるのに対して、マ・ハ・ラ行子音や母音音節などには並書表記が用いられていない。また、並書表記は語中・語末の無声子音を中心に用いられており、濁音や母音音節、語頭音などにはその数が限られていることから、並書表記が日本語のアクセントを示したと考えるにはあまりにも並書表記の偏りがあり、並書表記をただちにアクセントの表記として考えると矛盾が多い。

一方、荒木雅実(1975)は、並書表記される例を品詞別に分け、「名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞」における多音節語中の並書の場合は当時の日本語が濃音に近い音を持っていたとし、「助動詞・助詞」の場合は「とりたてて述べようとする意」、即ち「強調」の意味を持っていると推定している。しかし、荒木(1975)が、並書表記の例を品詞別に分けて「濃音」または「強調」であるとしたことや、同じ

品詞、同じ語であっても表記が一致していない点などによって、ただちに並書表記が「当時の日本語が濁音に近い音」であるとか「強調表現」であると位置付けることには疑問が残る。

## 2. 舌内入声音、促音を除いた並書・単書表記

『捷解新語』における並書の用例数は、原刊本970例、改修本1444例、重刊本1300例で、原刊本にくらべて、改修・重刊本においては並書表記が増えていることがわかる。このように並書表記の増加する理由は、原刊本に出現した「こそ」「の」の並書用例が改修・重刊本において激減したり、消滅する一方で、クワ・キヨ・シ・ス・セ・シャ・ショなどの並書音節が改訂版に新たに登場するからである。また、「てんき(ttyōin-kki)」のように、原刊本では見られなかった語頭の並書例が重刊本において見られるほか、原刊本の「まるする(ma-ru-su-ru)」が改修・重刊本において「まする(ma-ssu-ru)・ませう(ma-ssyō-u)」などとなり、500余りの並書が追加されたためである。その他、濁音の並書表記は、原刊本では4例だったのに対して、改修本22例、重刊本8例が見られる。一方、原刊本に用いられる並書の用例は多くの場合において単書表記されており、並書・単書表記の全体の用例数を比べてみると、並書970例に対して単書が819例見られる。

### 2.1. 「カ行」

カ行の場合には、清音各音節に並書が用いられる。カ行の音節において並書例を見ると、常に並書表記されるのではなく、以下に挙げる例のように並書と単書の表記が用いられる。その比率は242：61例で、語によって並書の用例数が多い場合と単書の用例数が多い場合がある。「か」の並書表記は「～か(係助詞、日数、濁音)／～かと、～かな、～から／おろかに、こまかに、しつかに、たしかに、にわかに／きつい、みちかい／ふさんかい／はつかし、むつかし」など、多種多様の語に用いられる。また、「き」表記には「てんき」、「く」表記には「かたく、ことく、とかく、ふそく、まんそく、わたくし」、「け」表記には「かたしけなう、ふなげ」、「こ」表記には「おとこ、みやこ」などの例が並書表記されている。以上のほとんどの例に並書表記が用いられるのに対して、「～かと、～かな、～から、ふさんかい<sup>14</sup>、てんき」などの例に並書・単書表記が用いられる。特に、「～かと、～かな、～から」などの例は並書表記より単書表記の例が多く見られる。

カ行の例を全体的に見てみると、すべて並書表記が用いられる例に、「～か(係助詞)75例、～か(日数)12例、ことく14例、わたくし13例」などがあり、大半が並書

表記される「かたしけな(う)」(並書21: 単書2例)の例がある。なお、形態面において語尾が「～かに」「～かい」「～かし」などのように同形の例に並書表記される場合が多く見られる。

## 2.2. 「タ行」

カ行と同じく、タ行の場合にも清音各音節に並書が用いられており、タ行に見られる並書・単書表記は505: 405例である。そのうち、「た」表記はすべてが助動詞の例だけで、「申た」と「～(ら)れた」の並書・単書表記の用例数はそれぞれ7: 6例と8: 21例で両表記があまり使い分けられていない場合がある。しかし、「た」の並書の6割弱を占めている「まるした」(57例)の場合には、すべての例が並書表記されており、「ち」の並書例である「あち、こち、そち」等の48例も、そのすべてが並書表記されており<sup>10</sup>、語によって並書・単書表記の使い分けが異なるようである。また、「つ」表記は、「おとつい、ひとつ、ふたつ」など多くの例が並書表記されるが、「いつ」の例だけは1: 6例で単書表記の例が多い。ただし、「いつ」例の場合は、後続語によって並書と単書を使い分けられているようである。例えば、「いつにても(i-ccu-ni-tyōi-mo)」(1例)は並書表記されるのに対して、「いつころ(i-cup-ko-ro)」(6例)は単書表記しか用いられない。「て」表記は、並書と単書の例がそれぞれ96例と292例で、並書に対する単書の数は3倍程度である。「と」表記は、並書用例と単書用例の数は242: 16例で、引用・並列助詞「と」や「ゆるりと、わざと、なんと」などの例がほとんど並書表記される。それに対して、単書だけが用いられる例は、引用・並列助詞「と」7例、「～なとと(-nan-to-to)」2例、「～かしと(-ka-si-to)」「～かなと(-ka-na-to)」「～ならはと(-na-ra-pa-to)」「こんと(来んと、kon-to)」「候やと(soro-ya-to)」)、助詞「とも」6例、「なにとそ」3例である。

タ行の表記例を全体的に見てみると、常に並書表記される例には「あち、こち、そち／ひとつ、ふたつ／するすると、なんと、ゆるゆると、ゆるりと、わざと」などの例がある。それに対して、「～た」は97: 85例、「～と」は185: 7例、「～て」は96: 292例で、並書も単書も用いられる場合があり、語によって並書と単書の用い方が異なるようである。

## 2.3. 「サ行」

サ行では、「そ」表記だけが並書表記される。「そ」の並書表記は、「さいそく」と「こそ」の2種で、「さいそく」の場合には並書と単書がそれぞれ1例、2例用いられるのに対して、「こそ」の場合には113例すべての例に並書表記 ko-sso が用いられている(改修本19例、重刊本8例)。このように、「こそ」のすべての例が日本語の上

平アクセントとは異なる ko-sso が用いられたのは、「こそ」の「そ」を並書表記としなければならない何らかの理由があったように思われる。そこで、「こそ」が朝鮮語対訳において強調の意味をあらわす「や」としても用いられている場合があることと関連づけて考えてみると、強調の意味を意識したあまり「こそ」の「そ」が強められた結果、並書表記されたのではないかと考えられる。例えば、「こそ」の朝鮮語対訳を調べてみると、原刊本は113例のうち強調の意味を持つ「や、自此社(卷十)」が11例見られ、改修本では19例のうち9例が、重刊本では8例のうち4例がそれぞれ強調の意味を持つ「や、自此社(卷十)」が用いられていることがわかる。ただし、ここで一つ疑問点として残るのは、「こそ」のアクセントが「上平」であるのに対して、高いところの「こ」に並書表記される例が一例も見られないということである。しかし、朝鮮語を母語とする編者が有気音と無気音の音韻論的区別をしていることと並書表記が一般的に語中・語末の環境で用いられていることを考えてみると、「こそ」の場合において「こ」ではなく「そ」が並書表記されるのが自然のように思われる。即ち、現代日本語のカ行音は語頭では有気音的であるといわれているが、同じように「捷解新語」の「こそ」の場合にも日本語の現実音を忠実に反映しようとした結果、日本語のアクセントとは異なった捉え方によって並書表記されたものと考えられる<sup>11</sup>。

#### 2.4. 「ナ行」

ナ行の場合には、助詞の「の」だけに並書表記が用いられる。「の」の並書と単書との割合は98:346例で、並書用例よりも単書用例のほうが3倍以上多い。並書が用いられる用例には「かい(甲斐)の~、あすの~、おもいのほか、ことのほか」など、固有名詞や慣用的表現を受ける場合が多く、単書が用いられる用例には「あなたの、そなたの」のような代名詞を受ける場合が多いが、並書と単書が明確な意識のもとに使い分けられたかどうかは疑問である<sup>12</sup>。また、三刊本における助詞「の」の並書表記は、原刊本では98例だったのに対して、改修本では4例に激減し、重刊本では全く用いられなくなった理由についても未だに明らかにされていない。森田(1957)においても「nn は助詞「の」に限るが、これがどんな意図で記されたのか明らかでない」とし、安田(1980)においても「同じ発言者の内部で、ノが二様に出ることは、要するにノを二様に聞きなし表記し分けたわけであろう」とされ、「の」表記が何を基準にして並書・単書として使い分けられたのかは言及されていない。

そこで、「の」だけが並書表記される理由について、並書表記が現れる環境と関連づけて考えてみることにする。辻星児(1991)において、「『捷解新語』は、外国人—朝鮮人—のための日本語教科書であり、この区切りは、学習に便ならしむために

付けられたものであることは確かである」とされるように、並書表記の場合においても日本語の発音に近い音として実現しようとした試みであると推測することができる。同じく、「の」の場合にも文節末の環境で並書表記されており、日本語の学習の便宜を図ったものと思われる<sup>\*13</sup>。但し、「の」の並書が日本語学習に役立てるための表記であるとすれば、原刊本だけではなく重刊本においても積極的に並書表記を用いてもよいはずであるが、改修本・重刊本にかけて「の」並書例の姿が完全になくなるのは何故かという疑問が残る。

この問題については、朝鮮語<sup>ン</sup>(nn)の消滅と深い関係があるようと思われる。朝鮮語の並書 nn は、朝鮮中期から近世初に限って現れ、近世初期以後<sup>ン</sup>が消滅したため、音注「の」の並書表記も用いられなくなったのではないかと思われる。このことは、カ・サ・タ行音の並書表記が原刊本と同様改訂版においても用いられているのに対して、助詞「の」の並書だけが nn の消失と同時期に急激に減少し、ついに重刊本以後には nn が一切用いられなくなるということからも裏付けられるのではないかと思われる。一方、<sup>13</sup>(1995)は、各自並書について、<sup>ン</sup>(kk), <sup>ン</sup>(tt), <sup>ン</sup>(pp), <sup>ン</sup>(cc), <sup>ン</sup>(ss)は、特殊な環境による音韻変化の allophone として‘音韻単位ではない硬音’であり、<sup>ン</sup>(nn)は「長音符号」である<sup>\*14</sup>とし、並書 nno が音声表記であることを間接的に示唆している。

## 2.5. まとめ

以上のように、カ行・タ行の清音各音節には並書表記が見られるものの、サ行・ナ行の場合には「そ」「の」の音節にしか並書表記が現れない。このような事実からサ行・ナ行の「そ」「の」に用いられる並書表記は、カ行・タ行の並書表記の性格とは異なるものとして考えなければならない。即ち、カ行・タ行の清音各音節が無声破裂音か無声破擦音であるのに対して、サ行の「そ」の場合は「さいそく」の1例を除いてすべてが係助詞「こそ」の例で、ナ行の場合は助詞「の」だけが並書表記として現れており、カ行・タ行、サ行、ナ行の並書表記が異質的であるようと思われる。ただし、並書表記の多くの例が語中・語末に現れるという点においては各行の別とは関係なく共通している。このように並書が用いられる位置や環境などについては4節で取り上げることにする。

一方、助詞「の」や濁音の並書例を除いては、無声子音が並書表記される場合がほとんどであることが指摘できる。特に、係助詞「か」、助動詞「た」、係助詞「こそ」、日数を表す「か」等のように並書表記だけの場合と、助詞「て、の、とも、～かと、～かな、～から」等のように並書表記も単書表記も用いられる場合がある。これらの例に対して「こと、さて、さためて、はじめて、たてまつり、ところ、ひ

とり」等の例のように語中・語末に無声の音節を持っていながら单書表記だけの例も少なくない。このように、並書表記、または单書表記される例は多種多様の語に至っているが、それぞれの語の環境や性格、語別、形態類型別に並書・单書表記を使い分けていることが多くの場合において認められる（《資料》参照）。

### 3. 「有氣音」「濁音」の並書表記

「舌内入声音、促音の書記例を除いた並書」用例のうち、前節で取り上げなかつた「有氣音」「濁音」の並書表記などを中心に考察を行う。これらの例は、和語・漢語の並書表記の一部に過ぎないが、並書表記の全体像を解するにおいて欠かすことのできない例である。

#### 3.1. 「有氣音」

「こそ」「の」等のように並書の用例数が極端に減っていく中で、それとは逆に韓国漢字音において有氣音である「てんき」（天気）、「さいそく」（催促）などの例は並書表記される用例数が増えていく。例えば、「てんき」の例を調べてみると、原刊本では「き」だけが並書であったのに対して、改修本では語頭の有氣音「て」にも並書表記が現れ、重刊本では、すべての例が語末の「き」はもちろん語頭の「て」にも並書表記が用いられる。

<表1> 「てんき(天気)」の例

用例	原刊本	改修本	重刊本
tyo(i)n-ki	10	1	
tyo(i)n-kki	7	2	
ttyo-in-ki		6	
ttyo-in-kki			11

また、「さいそく」の「そ」は、原刊本では3例のうち1例だけが並書表記されていたのに対して、改修本・重刊本では4例すべてが並書表記される。

<表2> 「さいそく(催促)」の例

用例	原刊本	改修本	重刊本
sa- 'i-so-ku	2		
sa- 'i-sso-ku	1	4	4

朝鮮語では、環境によって語中の無聲音が有聲音として現れる(朝鮮語は、音韻論的に有聲音と無聲音との対立がない)のに対して、有氣音の場合は語頭でも語中でも有聲音化されない。そこで、韓国漢字音において有氣音である「天」「促」などの影響により、語頭や語中でも有聲音化しないことを強調するために、ハングル音注において並書表記が用いられるようになったのではないかと考えられる。

なお、「かんほく(看品)」の例も原刊本の9例すべてが kam-ppo-ku のように並書表記されており、有氣音の場合多くの例が朝鮮語の影響によるものとして考えられる。その他、「批判」の2例には pi-pphan と phi-phpan が、「裁判」の1例には sa-i-phpan が用いられ、両方とも「判」の音注として韓国漢字音の有氣音 ph が含まれた並書を用いる点において共通している。「天」「促」などの例についても韓国漢字音の有氣音であることを意識した結果、有聲音化されないように並書表記が用いられたのではないかと思う。

### 3.2. 「濁音」

濁音の表記法は清音または半濁音で示し、その直前の綴り字の末尾に m・n・ŋ のどれかを加えるか、m・n・ŋ を一つの綴り字の中に取り込み、mp-・nt-・ŋk- のように示すのが一般的である<sup>15</sup>。しかし、これらとは別に原刊本から重刊本にかけて濁音が並書表記される例が現れる。以下に、そのすべての例を取り挙げる。

原刊本(4例)・・・1節の2)濁音の並書例(p3)の再掲。

すいもくせん加ほむしろ加わるうて(水木船が帆筵が悪うて)(一14)

われらなわなに加して御さる(我等名は某で御座る)(一17)

もんこん加ようて(文言が好うて)(三12)

とうもこうも申されん加(如何も斯うも申されんが)(四13)

改修本(23例)

おとといここもとゑくた里まして(昨日爰元え下りまして)(一1)

御こころおそあられくたされませい(御心を被添ら被下ませひ)(一6)

へちに申てくたされう加とそんして申まする

(別に申して下されうかと申しまする)(一38)

とうらい加このあいたわ御ひやうきて御さつた加

(東萊が此の間は御病氣で御座ったが)(一39)

そさしゆゑさしつ加ゑのないたんお申あけて

(送使衆え差し支えのない段を申上で)(一43)

されいわさんしのまて御さるほとに(茶禮は暫時の間で御座る)(一44ウ)

きやくしん加きてこそ(客人が来てこそ)(一48ウ)

せいたして申あけてみませうけれども

(精出して申上て見ませうけれども)(一49ウ)

もんこん加ようて(文言が好うて)(三16オ)

このくにのしんかになりましたほとによろつのことお

(此國の臣下に成りました程に萬のことを)(三20オ)

まゑよ里は加里のつよいよわいのいてい里に

(前より秤の強い弱いの出で入りに)(四2オ)

きみよう御さはきくたされませい(氣味好御捌き被下ませひ)(四4オ)

おのおのにも御そんして御さりませう(各にも御存で御座りませう)(四17ウ)

御つ加いわなに加して御さりまする(御使は何某で御座りまする)(五2オ)

御たいきな御わた里て御さりまする(御大儀な御渡りで御座りまする)(五8ウ)

い加うやすいことて御されとも(いかう易い事で御座れども)(五32ウ)

せんこのおもむきおねんころにさんしまて申たれは

(先後の趣を懇ろに三使まで申したれば)(五41ウ)

おおせられまするたう里もつともてわ御さりますれとも

(仰せられまする通り尤もでは御座りますれども)(六25オ)

ゑとの御らうちうよ里おくられましたきんすお

(江戸の奉行より送られました金子を)(八27オ)

さやうにおおせられまして加たしけなう御されとも

(左様に仰せられまして忝御座れども)(九3オ)

これ加ひとつのきすとわおもゑとも(是が一つの疵とは思えども)(九14ウ)

いま加もはやしうねんあま里にもな里ますれとも

(今が最早十年餘りにも成りますれども)(九28ウ)

されともはらもたてられす(然れども腹も立てられず)(九29ウ)

### 重刊本(9例)

さきに。いれて。くたされ。ませい(先に入れて被下ませひ)(一29ウ)

御。いて。さつしやるる。やうにして。みさつしやれい

(御出さつしやる、様にして見さつしやれひ)(二6ウ)

もんこんかようて(文言が能うて)(三15ウ)

この。くにの。しんかに。なり。ましたほとに。よろつの。ことお

(此國の臣下に成りました程に萬のことを)(三19オ)

おのおのにも。御そんして。御さりませう(各にも御存で御座りませう)(四16ウ)

御。つかいわ。なにかして。御さり。まする

(御使は何某で御座りまする)(五24)

いち。にちても。御。くつろけ。なされて(一日でも御寢被成て)(五174)

おとり。まする。やうすお。みますれば(躍まする様子を見ますれば)(六104)  
つしまゑ。つきました。とうせんに。よろこひ。まする。ところに

(対馬え著ました同然に歎びまする處に)(八144)

1節でも述べたように、先行研究においては濁音の並書表記についての指摘がほとんどないと思われる。しかし、濁音に並書が用いられる例は、並書全体数から見ると少数ではあるが、濁音の一般的な表記法とは相違する点において注意されるところである。濁音の並書用例は、原刊本4例、改修本23例、重刊本9例で、計36例のうち、語頭の並書表記例は改修本と重刊本にそれぞれ1例ずつ見られる。また、音節別に用例の分布を調べてみると、ガ行(か)6例とダ行(た, つ, て, と)30例でカ行・タ行の濁音に並書が集中して見られるが、その理由は何か。そこで、まず、影印本でハングル表記を調べてみると、ガ行のㄱ(kk)とㆁ(ŋk)の表記は区別しやすいのに対して、ダ行のㄸ(tt)とㅆ(nt)の表記は区別が付かない場合がある。即ち、ㆁがあるべきところに tts を、ㅆがあるべきところに tt を用いる誤植が生じた可能性も考えられる。しかし、音注を写した編者が朝鮮語を母語とする朝鮮人であることや原刊本のㆁ(ŋk)、ㅆ(nt)が濁音の並書例と一致する例が一例も見当たらないことなどから考えると、ㆁを tts に、ㅆを tt と間違えるような単なる表記の問題ではなさそうである。また、濁音に並書表記が用いられる環境や語別から見ても、ただの表記の誤りのようには考えられない。

一方、小倉(1928)は朝鮮語の硬音について「濁音なり」「清音と濁音との中間音である」「有聲音的性質を帶びて居る」とする。このような観点から考えてみると、日本語の濁音をハングル音注において並書表記(硬音)として表したとしても不思議ではない。本節で取り上げる濁音の例は、用例数は少ないが並書表記36例のうち「くたさる」「~て御さる」「~とも」のように、同じ語が繰り返して並書表記されることから考えてみると、これらの例はただの誤植の問題だけではなさそうである。特に、濁音「か」のすべての例(原刊本3例、改修本2例、重刊本1例)が撥音「ん」に後続する例として、ゆっくりと丁寧に発音された撥音に後続する濁音を、有氣音と無氣音の対立を持つ朝鮮語を母語とする編者が無氣音として捉えた結果、並書表記が用いられたと考えるのである<sup>16</sup>。

その他、並書表記は一般的に語頭に用いられないが、「たん」(段)、「とうせん」(同前・同然)<sup>17</sup>、「たいくん」(大君)等の例は語頭において並書が用いられている。

これらの例は漢字音の全濁音である点で共通しており、正音表記における全濁音を各自並書として用いた<sup>\*18</sup>ことと一致している。このように考えてくると、全濁音の並書表記はただの誤謬というより、知識層が持っていた漢字音の影響によるものであるという考え方も排除しきれないのではないかとも思われる。以上の例からもわかるように、濁音には、環境や語の性格によって **m**・**n**・**ŋ** のような鼻音を伴う表記(有声音)の他に、並書表記(硬音)が用いられたことになるが、有声音と硬音との関わりについてはさらに緻密な検討を行わなければならないと思う<sup>\*19</sup>。

#### 4. 並書表記が用いられる環境

前節までの調査から、語中・語末の音節を中心に並書が用いられていることと、並書表記が語に固定しておらず場によって並書表記も単書表記も用いられることが明らかになった。そこで、本節では同じ刊本の同じ語がどのような場合に並書表記されるのかについて、それが用いられる環境を中心にいくつか例を挙げて検討してみる。

##### 4.1. 語中・語末の並書表記

並書表記が用いられる位置としてその優先条件は、「①語末・文節末の無声子音、②語中の無声子音：後続の音が無声子音でない場合、③語中の無声子音：後続の音が無声子音である場合」の順であることが指摘できる。

###### 4.1.1. 「～かと」、「～たと」

「～か(係助詞)」と「～かと」の例を調べてみると、「～か(係助詞)」の場合は、すべての例が並書表記されるのに対し、「～かと」の場合の「か」は、並書用例より単書用例のほうが多いことがわかる。また、-ka-tto のように「と」だけが並書表記されるか、-kka-tto のように「か」と「と」ともに並書が用いられるのに対して、-kka-to のように「か」だけに並書が用いられ、「と」に単書が用いられる例は一切存在しない。

###### ・助詞「か」+助詞「と」

-kka-tto(14例)：みまるせう加とおもいまるする(二179)

-ka-tto(20例)：やまい加なおおもる加とおもいまるする(二54)

-kka-to(該当例ナシ)

同じように、「～たと」の例をみると、助動詞+助詞の-tta-tto が3例(すべてが促音例、-na-tta-tto-、-ŋko-za-tta-tto-、-ma-i-tta-tto-)、助動詞+助詞の-ta-tto が8例見られるが、助動詞+助詞の-tta-to のような例は見られない。

#### ・助動詞「た」+助詞「と」

-tta-tto(3例)：はや御さとそんしまるしたに(五4ウ)

-ta-tto (8例)：ねんころにさしられたとおしらるほとに(五7ウ)

-tta-to(該当例ナシ)

以上の「か」や「た」に無声子音「と」が後続する「～かと」「～たと」の例からもわかるように、「か」や「た」が語末で現れる場合は多くの例が並書表記されるのに対して、同様の例が語中に現れる場合には単書表記のほうが優勢である。さらに、「～かと」「～たと」の例で、「と」が単書表記されて「か」や「た」が並書表記される例が一切見られないことからも、それぞれの音節が現れる環境と表記とは密接な関係にあることが確認できる。

#### 4.1.2. 「～てこそ」

接続助詞「て」の並書表記と単書表記との割合を係助詞「か」や助動詞「た」、その他の例とくらべてみると、並書表記に対する単書表記の数が一段と多いことがわかる。そこで、接続助詞「て」に「こそ」が後続する「～てこそ」の例を調べてみると、並書表記の-tyoi(ŋ)-ko-sso は4例見られるのに対して、単書表記の-tyoi(ŋ)-ko-sso は45例が見られる。このように、係助詞「か」や助動詞「た」等の例と接続助詞「て」の例において並書表記と単書表記の割合に大差が見られるのは、係助詞「か」や助動詞「た」などの例が文節末に現れやすいことと、接続助詞「て」の例が文節中に現れやすいこととに関連しているようである。また、並書表記が一つの語句内に2ヶ所に分かれて用いられる例がほとんど見られないことから考えると、「～てこそ」の場合は「こそ」の「そ」が必ず並書表記されるのに対して、「て」のほとんどの例は単書表記されるのが一般的であるといえる。一方、原刊本における「て」の並書表記が96例見られるのに対して、改修本、重刊本においてはそれぞれ210例、208例であり、原刊本の改修の過程で「こそ」の用例数が減少していくことと「て」の並書表記が増加していくことには関わりがあるようだと思われる。即ち、「こそ」の数が減少していくことによって、「て」の例が文節末の環境に現れやすくなつたことが改修本・重刊本において「て」の並書表記が増加する一因になったと思われる。

#### 4.2. 先行母音と並書表記

荒木(1975)は並書音節の先行母音として「イ・ウ」音節が多く用いられるのを指摘しているものの、結局並書が何の目的で使用されたのかについては不明であるとする。しかし、本節で並書表記と先行母音との関わりについて検討してみた結果、カ行の場合は先行母音 u が多く、タ行(た, て, と)の場合は先行母音 i が多いことがわかる。

<表3>先行母音と並書・单書表記

並書・单書 先行母音	k 系		t 系(た, て, と)		c 系(ち, つ)		s 系		n 系	
	-kk	-k	-tt	-t	-cc	-c	-ss	-s	-nn	-n
i-	39	423	262	282	22	192	1	382	39	603
yɔ(i)-	8	184	43	290	23	34	0	178	10	218
a-	44	534	145	337	8	132	2	741	20	350
o-	24	706	29	424	67	156	113	459	13	834
u-	103	368	66	161	4	67	0	777	16	617

上の<表3>の数字は先行母音に対する並書と单書の用例数で、全体の数を見ると並書の数を单書の数がはるかに上まわる。k 系は先行母音 u、t 系は先行母音 i のほうが他の先行母音と比べて比較的の並書例は多く現れる。特に、k 系と t 系の並書の数が他の系より多いことは明らかである。そこで、k 系と t 系の共通点を考えてみると、両者共に並書の音節が無声破裂音で先行母音が狭い母音 u, i である場合に並書表記が多く見られることがわかる。このようなことから並書が発音上の問題と密接な関連性があるものとして推測できるのではないかと思う。即ち、u-k, i-t のような先行する狭い母音に続く無声破裂音を、朝鮮語を母語とする編者が聞き、発声器官を緊張させてから息を詰めて出す朝鮮語の硬音としてとらえた結果、u-kk, i-tt のような並書表記を用いたのであろう。また、n 系においても先行母音 i に後続する n の並書例 i-nn が他の先行母音に後続する例に比べていくらか多く見られる。特に、n 系の並書は原刊本で98例あったのが改修本においては4例に激減するが、その4例のうち先行母音 i が3例、先行母音 yɔi が1例で、いずれも n 系の調音点に近い狭い母音だけが残存しており、先行母音と並書との関係を裏付けてくれる例と考えられる。以下に、改修本における「の」並書4例を示す。

かいのくに (甲斐州 九324)

おもいのほか (慮之外 十中94)

わいのうら（鰐浦 十中19<sup>†</sup>）

とうめのあんない（遠目案内 十中15<sup>ウ</sup>）

ただし、並書・単書表記が一定していないことから考えてみると、「捷解新語」の並書表記がある規範性に基づいて用いられたのではなく、あるがままの音を忠実に反映しようとした結果のようである。このような表記のゆれは先行母音と並書との関わりにおいても見られるものの、u-kk, i-rr のような並書例が多く見られることから、先行母音と並書との関わりは否定できないと思われる。

一方、c 系と s 系の並書には舌内入声音の例や語の性格により k 系や t 系と同じ並書例として取り扱うことができない。例えば、c 系には先行母音 o の並書「こち、そち」の例が多く、先行母音 o をはじめ他の先行母音にも舌内入声音「ち、つ」の並書例が多数現れている。また、s 系には主に「こそ」が並書表記されており、ただちに先行母音とのかかわりを考えるには無理がある。

## 5. 結論

本稿では「捷解新語」に用いられる並書表記のうち、舌内入声音、促音の書記例を除いた並書表記と単書表記を中心に調査・考察を行ってきた。以上の調査・考察から、カ・タ行各音節、「こそ」「の」「有氣音」「濁音」などの並書表記が均質的でないことは明らかであるが、「捷解新語」における舌内入声音、促音の書記例を除いた並書表記の傾向だけを大まかにまとめてみると、以下のようなになる。

- ①語末・文節末に用いられる：並書全般に関わる
- ②先行母音との関わり：カ行(u-kk)、タ行(i-rr)、ナ行(o, i-nn)
- ③強調の意味から：サ行(こそ)
- ④朝鮮語(漢字音、硬音)の影響による：有氣音、濁音、ナ行(の)

上記①のように、語末・文節末においてほとんどの並書例が関わってくるのは、語末・文節末の無声破裂音と無声破擦音が強く聞こえることから、編者が硬音(濃音)として感じ取られたようである。そのような傾向を反映した結果、並書表記が用いられたものと考えられる。②③④の場合には、並書が用いられる理由は多岐にわたっており、その一つ一つの理由を明解にすることは難しい。但し、「捷解新語」における並書表記が音韻表記ではなく日本語の現実音を忠実に反映した音声表記であると考えることによって、表記においてゆれが見られるのも不思議ではないし、語末・文節末で用いられる多くの並書例が朝鮮語における硬音の弁別資質<sup>20)</sup>と一致することも当然のように考えられる。即ち、「捷解新語」の外国人向けの日本語学習書であるという性格から、一つ一つの言葉を強めたり、ゆっくり丁寧に発音する

ことが推測され、その結果、主に先行母音との関わりをもった無声破裂音が語末・文節末という環境において並書表記に硬音や長音のような資質を反映したのだと考えられる。中東(1998)では、現代日本語の韓国語話者による発音観察の結果、語中の無声閉鎖音には一般的に硬音(濃音)が用いられるということは、朝鮮語を母語とする『捷解新語』の編者が語中・語尾の無声子音を並書表記したことと関わりがあるようと思われる。

以上、本稿では原刊本を中心に並書表記の考察を行ってきたが、その他の刊本における並書表記の考察までには至らなかった。今後の課題として、朝鮮資料のほかにキリストン資料や日本の仮名資料などを総合的に検討・分析を行い、さらに並書表記に残された問題点などを究明していきたいと思う。

## 注

\*1 並書表記とは子音を二つ重ねた表記のことで「重ね子音」とも呼ばれる。

\*2 朝鮮資料における並書表記については、辻星児(1975, p4)でも「当時の濃音表記は各自並書(kk, tt 等)は少なく、toin-si- 'os による合用並書(sk, st 等)の表記が一般であるのに、本書の音注においては、促音その他を示す場合の表記として、全て各自並書に統一されていることも注意される」と述べられている。

但し、ハングル音注に用いられる合用並書st-の例は1例見られる。

おおせられませうと(sto)のきて御さる(改修本, 七21わ)

この例は、音注において各自並書を用いることを原則とする反例で、中期朝鮮語の固有語表記(合用並書)による誤植例として考えられる。

\*3 「捷解新語」におけるハングル音注のローマ字表記は、基本的に河野六郎(1994)のローマ字表記法に基づく。

\*4 「舌内入声音、促音の書記例を除いた並書」とは、並書表記のうち舌内入声音や促音としては認められない例を指す。以下、本稿で「並書(表記)」と記す場合は「舌内入声音、促音の書記例を除いた並書」を示す。なお、舌内入声音、促音を除いた理由については、両者がほとんど規則的に並書表記されており、つまつた感じで閉鎖が持続している音を反映した結果、並書が用いられたと考えられるからである。

\*5 「つかわしらる」は原刊本の6例のうち、1例だけが語頭の並書例で、その他の5例は単書表記されており、語頭の「つ」を並書として表記しなければならない理由は見つからない。また、改修本と重刊本においても同様の例は見られず、重刊本の「てんき」の語頭「て」の例だけが並書表記されている。

\*6 Cho(1970, p157-177)参照。

\*7 荒木雅実(1975, p67)においても、「四座講式の研究(金田一春彦著)」「補忘記(貞享

版)」にあたってみたが、「捷解新語」と同じ語彙が思ふやうに拾ふことができなかつた」「並書がアクセント記号であるなら、特定の音節に限定されてゐるといふのもいかがなものか」とあり、並書はアクセントとは無関係なものと考えられる。

- \*8 安田章(1980, p69)では、「古今集の声点本や平家正節などで、ほとんど上平であらわれるるのである」とされる。
- \*9 安田章(1960, p236)参照。朝鮮語の場合、語中の無聲音 [k] [t] が [g] [d] のように有聲音化する傾向があり有聲音にならないように注意をした結果、促音のような「釜山浦 hu-san-kkai」(「浦」は朝鮮語 kai)を用いたとされる。しかし、並書に対して单書例が半数程度占めており、語中の無聲音が有聲音にならないように並書表記を用いたと考えるには疑問が残る。また、濁音の並書例については説明に窮することになる。
- \*10 これらの例は、「日葡辞書」において「Achi, Cochi, Sochi, Dochi」として現れており、「捷解新語」の並書とは対照的である。「日葡辞書」の見出し語に子音二重字表記の例が極めて少ないので、「編者は、日本語を日本語としてローマン体で表記する場合には、子音二重字を用いない方針であった」(森田武1993, p159)とされるように、原則として非促音形を用いたようである。なお、三刊本に用いられる並書は、「日葡辞書」においては、すべて单書表記(非促音形)が用いられている。
- \*11 服部四郎(1944)には、外国人に対する日本語教育において「場合によってはアクセントを無視して、もっと重要な発音的特徴を把握させるよう努める方が遙かに効果的なこと」であるとの指摘がある。
- \*12 荒木雅実(1975)は、並書される「の」は、比較的、固有名詞、代名詞、場所・時間・慣用的表現などを表す場合が多いとするが、「そなた、こなた」等の代名詞の場合は、並書と单書との比率は3:14で单書のほうが多く用いられるなど、「の」に先行する音節により並書と单書が明確に使い分けられたかどうかについては疑問が残る。
- \*13 原刊本や改修本には重刊本のような文節間の区切り点が用いられていないが、「捷解新語」が日本語学習書であることを考えてみると、原刊本や改修本においても任意に文節や句の単位で読んでいたことは予測可能のことである。
- \*14 丘千鶴(ト・スピ, 1995, p104-156)参照。各自並書が使われた期間とその後の記録の煩雑さを理由に、音韻単位ではなく硬音的音声、即ち、音声単位として前後音の連接関係からなる発音現象を忠実に記録するための Phonetic Sign と位置付けている。
- \*15 安田章(1960, p299)参照。
- \*16 擬音に後続する濁音の並書例の他に、擬音に後続する無声子音の例にも並書例が多々見られる(原刊本; 「釜山浦 hu-san-kkai」8例、「天気 tyo (i)n-kki」7例等)。
- \*17 「とうせん」(同前・同然、重八14ウ)の例は濁音の並書表記として取り挙げてはいるものの、「と」並書のハングル音注の書き方からみて、濁音表記 nto を並書表記 tto とした印刷上の誤謬の可能性は否定しきれない。

- \*18 辻星児(1975,p27)参照。朝鮮司訳院の「中国語教科書の正音表記」は、「捷解新語」に現れる濁音の並書表記と同様に、全濁音の音注に各自並書が用いられている。また、訓民正音の<解例>のうち文字を作る原理を説明したく制字解>には、全濁音を各自並書として表記するという記述がある。
- \*19 吳(1988)は、中国の全濁音を朝鮮語の音韻に対置させるとき継続性の表記である各自並書がもっとも適切であったとし、各自並書が有声音に近似していることを示している。また、現代韓国語において、バカ、バケツ、back、busなどの有声音の例に硬音が用いられるという事実にも有声音と硬音とが関係していると考えられる。
- \*20 吳(1988,p130-134)参照。

#### 参考文献

- 荒木雅実(1975)「「捷解新語」の並書法について」国語研究38
- 小倉進平(1928)「朝鮮語の toin-siot」『岡倉先生記念論文集』研究社
- 河野六郎(1994)「ハングルとその起源」「文字論」三省堂
- 辻 星児(1975)「原刊「捷解新語」の朝鮮語について」国語国文44-2  
(1991)「重刊改修捷解新語に見られる区切り小点について」  
朝鮮語史における「捷解新語」(1997)所収
- 中東精恵(1998)「韓国語話者の英語音声と日本語音声—聞き取り・発音調査の結果からー」音声研究2-1
- 服部四郎(1944)「標準語とアクセント」「言語学の方法」(1960)所収
- 濱田 敦(1955)「語末の促音」国語国文24-1
- 福島邦道(1995)「統々キリシタン資料と国語研究」笠間書院
- 森田 武(1957)「捷解新語」「捷解新語解題篇」  
京都大学文学部国語学国文学研究室(1973)所収  
(1993)『日葡辞書提要』清文堂出版株式会社
- 安田 章(1960)「重刊改修捷解新語」「捷解新語解題篇」  
京都大学文学部国語学国文学研究室(1973)所収  
(1980)「朝鮮資料と国語表記」「朝鮮資料と中世国語」所収  
(1987)「改修捷解新語」「外国資料と中世国語」(1990)所収
- 吳 貞蘭(1988)『硬音의國語史的研究』翰信文化社
- 도 수희(ト・スヒ)(1995)『韓国語音韻史研究』塔出版社
- Seung-bog Cho(1970)『A PHONOLOGICAL STUDY OF EARLY MODERN JAPANESE  
ON THE BASIS OF THE KOREAN SOURCE-MATERIALS Vol. II』  
ALMQVIST & WIKSELL. STOCKHOLM

## 辞書・出典類

『パリ本 日葡辞書』(1976) 鮎誠社

土井忠生(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店

洪 起薰(1985)『原本国語国文学叢林 蒙語類解 倭語類解 捷解新語』大提閣 ソウル

『原刊活字本 捷解新語』(1990) 弘文閣 ソウル

『重刊捷解新語』(1990) 弘文閣 ソウル

安田章、鄭光 共著(1991)『改修捷解新語』太學社 ソウル

## 《資料》原刊本の並書・単書表記用例

	並書だけの場合	並書・単書の場合	単書だけの場合
語頭		つかわしらる	こと
語中	あつかまし / うかと, しかと おうかた(大方) おろかに, しつかに, たしかに, にわかに みちかい / かんほく はかり (pa-ka-ri) / わたくし あつらい, おとつい, きつよる	助詞 ~かと, ~かな. ~から, ~とも こまかに / むしつけ きつかい, ふさんかい はつかし, むつかし かたじけな(う) さいそく / なにとそ	さて さためて はじめ しかしか なかなか とき たてまつり
語末・文節末	係助詞 ~か / 係助詞 ~こそ 並列助詞 ~つ / 助詞 ~かと 助動詞 ~た(まるした) ふつか, ここのか, どうか, はつか うかと, しかと / ことく ふそく, まんそく / ふなけ みやこ / あち, こち, そち ことはのけち / つつ(ずつ) ひとつ, ふたつ するすると, ゆるゆると, ゆるりと なんと, わざと / やいと 濁音 ~か, ~て	接続助詞 ~て 引用・並列助詞 ~と 助詞 ~の 助動詞 ~た (まるしたを除外した例) てんき かたく いつ	ところ ひとり ……等

(2000年7月20日 受理)